慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	M・T・ウァメル著 古典賃銀学説の発展
Sub Title	
Author	三邊, 清一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1942
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.36, No.4 (1942. 4) ,p.355(85)- 360(90)
JaLC DOI	10.14991/001.19420401-0085
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19420401-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論、年ニ兩三度ツヽ讀聞セ、常ニ掌ニ能覺させ、法外之筋堅相愼セ可申候、殊更男子之分幼少之時分能聞覺させ、理非善惡之辨能先祖之御高恩聞傳ヘ候樣、本家方正月節會出席懈怠爲致申間敷候事、

幷ニ家法定式五冊、ケ條之趣ハ我カ家之學文、且先祖親ヽ江生前之對面ト存、無等閑折ヽ眞讀致、其意味深相考會得仕、掌ニ自知致、先祖代ヽ之御心ニ相叶候樣、平生諸事失念間違無之樣、再應心學可仕候、尤ケ條ニ相洩候類在之候ハヽ、右之意味ニ准シ、連家・別家中無遠慮書加ヘ可被申候事、

附リ元祖之御主人法名釋惠林居士十一月十四日正當御忌日ニて、業祖爲冥加、家名講と名附ケ、每年十一月上旬分中旬迄之內、日限勝手次第、兩本家ニおゐて夜分家族之衆中會合致、右家法定式五冊之趣眞讀致、承知可仕候事、

但シ會合精進禁酒可爲候事

家法定式　五冊

吉凶定式　五冊

都合拾冊也』

安永六丁酉年正月

附記　拙稿「明治維新と商家心得書」（拙著『明治維新』所收三一七頁）に、板本「主從日用條目」の著者、善次郎事池田義信を何人であるか不明と記して置いたが、後になつてそれが一雀庵主人、溪齋英泉であることに氣がついた。同書に同人の著書「善惡名所圖會」の廣告が掲載されてゐるにも拘らず、あまりにかけ離れてゐたため氣がつかなかつたのである。

（昭和十七年三月十九日稿）

M・T・ウァメル著『古典賃銀學說の發展』

Wermel, Michael Theodore:— The Evolution of the Classical Wages Theory.

New York: Columbia University Press, 1939. Pp. xii 190 $ 2.25.—

三邊清一郎

本書は、二世紀に近い發展を辿つてリカアドオの生活賃銀說となり、更に後にラサールの所謂「賃銀鐵則」として社會運動の理論的根據となつた古典賃銀學說の生成と發展の批判史である。

著者はまづ第十七世紀初頭のイギリス重商主義文獻　殊にトマス・マンの著作にこの學說の萠芽を認める。彼は、勞働者は全く働くことを好まないから、飢餓でこれを强要する必要があるといふことが、どく初期の著作家の議論の出發點となり、根據となつてゐることを指摘してゐる。（p. 3）。それから續いて五章に亘り、特にペティ、ロック等の重商論者、獨佛の諸家、カンティロン、フォジオクラートとその後繼者達、マルサス以前の人口論者の著作を尋ねる。第六章では古典的綜合としてスミス、マルサスを取扱ひ、そして第七章では終局的綜合としてリカアドオ及びラサールを論じてゐる。

相當頁を費してラサールを論ずるこの最後の章は、本書の特徵をなすものではあるが、著者自身は彼れをあまり

高く買つてゐない。「リカアドオが『賃銀鐵則』の父であるとすれば、ラサールは正にその名付親である。」彼れはその名を與へ、その社會的、政治的意義を高揚したが、理論的にはなに物も加へなかつた。彼れはたゞリカアドオの說を繰返してゐるに過ぎない。唯一の獨創は、賃銀の安定要素として勞働者「移動」の觀念を取り入れて、リカアドオの所說に、チュルゴーのそれを附加へたことである。だから「彼れの經濟上の意見は調和と一致を缺いてゐる。その歷史的重要性は、リカアドオの賃銀論の普及化とその社會的、政治的推論にある。」といふのがその見解である。（p. 161-68）。

かくて彼れは全篇を要約して次ぎのやうに言つてゐる。——

一、眞劍な賃銀論は、まづ實際政策の形をとつて、第十七世紀後半のオランダ及びイギリス經濟文獻に現はれた。これ等の研究は、一般に賃銀を最低生活水準に引下げる要を强調した。主な論據は、（イ）、勞働者の能率を擧げるには、彼等を飢えで威かさねばならない。（ロ）、低賃銀は生產低減の必要件であつて、世界に於ける市場競爭上自國產業に有利だ、といふにある。

二、ところがこれ等政策論は、政策意圖實現の方法に關する問題を提起し、賃銀の變動原因とその平均水準決定條件の研究を必要ならしめた。そして第十七世紀のイギリスの經濟學者等は、理論方面に眼を向け、二つの結論に達した。すなはち、（イ）、賃銀はいつも最低生活水準に向つてゐる。（ロ）、賃銀を決定するものは、勞働への需要供給である、といふのである。

三、（イ）は正しい形では述べられてゐないけれども、ペティの寧ろ抽象的な理論的言說の根底を成してゐるものである。これを正しい命題に推し進めたのはロックである。彼は交換經濟の自由競爭裡にあつて、ひとり賃銀のみが最低生活水準に向ふと考へ、この傾向を、勢力、依存の社會關係として說明した。（ロ）は老カルペッパー（一六二二年）にまで遡り得るのである。

四、勞働人口の地域的移動狀態を觀察して、チャイルドはこれ等移民と賃銀水準の變動の關係を考へ、ボアギュルベールは、この思想を、賃銀の生活水準への强制が勞働の需給を均衡ならしめるといふ考と結び付けた。そしてこの結合から、勞働の供給は勞働需要が決定する。勞働者數は、いつも需要の大いさに順應する、といふ結論が導き出された。すなはちカンティロンの說くところである。この思想がケネー、テュルゴーのフォジオクラート等によつて發展され、こゝに初めて賃銀の「鐵則」が姿を現はした。彼等は、勞働人口の移動を、賃銀の固定化、最低化の最も重要な要因と觀たのである。

五、がしかし、賃銀の客觀的固定最低限への不斷の傾向を、このやうにして理論的に强固に說明できないことが、フォジオクラートの主張に對して一の反動を生んだ。これは固定的賃銀水準說を非とするコンヂャックの所論のみならず、賃銀最低化の經濟的根據擁護論を罷め、社會勢力の相互關係に眼を移したネッケルの諸著作にも覗はれるところである。ジェームズ・ステュアートの著作では、勞働の「價値」とその正しい標準との問題に就いての舊い叙述への復歸が見られる。

六、ステュアートのこの方面への貢獻の實際の意義は、賃銀の「動的」問題の系統的叙述と、その分析にある。彼れは後の經濟學者が一層充分に發展させた二法則をうち樹てた。分配動態理論——これは後にリカアドオの發展さすことゝなつて、經濟的進展の途上では、名目賃銀が增進を見るといふにある——、及び產業は農業生產力を犧牲にして發達するといふ思想、すなはち後にフランツ、オッペンハイマアの賃銀說の根本思想となつたものがこれ

である。

七、アダム・スミスの時代まで、人口理論は、多かれ少かれ賃銀問題とは關係なく發展して來た。歴史的に人口理論發展の跡を顧みれば、明かに三段階に區分される。第一段階では、人口の大增殖は大きな不幸だと考へられた。第二期では、人口の大いさは、利用可能の食物供給と平行すると思惟された。そして最後の第三期には再轉して、人口は食物供給の利用可能量よりも速かに增進すると考へられるに至つた。この思想が自然的貧窮理論の發展に取入れられて利用された。

八、アダム・スミスはその賃銀水準の研究を、これを決定するに社會的諸勢力の論から初め、この諸勢力は確定したものとして考へて、勞働水準を決定する經濟的諸勢力の分析に進んだ。彼は初めて、勞働の供給は勞働需要の變化に順應する道程に於いて變化するといふ思想と、人口理論とを公式に纒め上げたひとである。これが止に第二期の學說、すなはち人口の大いさは利用可能の食物供給量と平行する、として記されるところである。かくて出生、死亡の人口論的作用が、勞働人口の地域的移動說に代つた。そして賃銀への壓迫が苛酷この上もないものとなり、自然論的意義を獲得したのであつたが、しかしスミス自身はその賃銀論を、生活資料說として構成せず、需要供給說として說述した。

九、マルサスはその賃銀論を需要供給說として發展した。勞働に對する需要は、「勞働維持のため」の生活資料「基金」によつて決定される。この「基金」は一般「收入元本」の一部としてのみならず、また土地の沃度遞減法則によつて自然的に限定せられる量だと考へられる。勞働の供給は人口の原理によつて定められる。人口理論に從へば、人口は利用可能の生活資料の蓄積よりも、速かに增殖する傾がある。マルサスは、賃銀は、だゞ露命を繋ぐだけの生活資料の最少限に向ふ傾は免れない、とは主張してゐない。彼の人口法則をづき詰めてゆけば、こうした結論は避けられないのであるが、しかし彼はその理論を、勞働の供給に對する「道德的抑制」の影響の可能性に適應させることを望んだから、こういつた陳述を避けたのである。

一〇、リカアドオの賃銀論は、アダム・スミスの稍〻分散的な研究を一の統一ある公式に纒め上げた產物である。フォジオクラァトの着想と考へ合せて賃銀「鐵則」の再現と思惟していい。ラサールはこの法則に名稱と政治的應用を與へたに過ぎない。（P. 169-72.）。

シカゴ大學のフランク・K・ナイト Frank K. Knight 教授は本書を批評して、古典的生活賃銀說がもつ多義性を看過するものであるとしてゐる。生活水準なる觀念は、先づ生理的要求からする最低限と、慣習及び社會的標準から限定されるそれの二解釋を許す。そして著者もこの區別は認めてゐる。けれども古典諸著作のうちには猶ほ二つの異つた生活賃銀論が見出されるのである。一つは、賃銀は人口の原理の作用の結果、最低限に低落する傾がある と論ずる、言はゞ「長期說」である。この方は古典諸文獻中にも割合明白に述べられ、比較的一般に認められるところである。けれども雇傭者は勞働者を搾んでゐるから、短期をとつても彼等は、勞働者が生きてゆき、その仕事をするに必要なだけの賃銀をしか支拂はないといふ思想は、それとは別なものである。この說は明白には諸文獻中に述べられてゐないけれども、利潤は賃銀を支拂つた後に殘る剩餘だとする古典的賃銀論中に、明かに認められるものだといふのである。

本書がかゝる批評を許すことは確かである。殊に現代の資本主義社會の「賃銀鐵則」は、マルサスの人口論でなく、ナイト教授の前記第二說を基礎とするものとも、考へられるからである。けれどもコロンビア大學圖書館のセリグ

M・T・ウェルメル著「古典貨銀學說の發展」

マン文庫の豐富な經濟學文獻を渉獵驅使して論述したといふ本書は、その方面に於いて吾々を教へるところが多い。たゞ著者は、學　の紹介、解說に於いて甚だ親切であるに對して、積極的にその理論的結果を明かにするにいさゝか及ばないものがある。本書はこの點に於いてなほ批評の餘地あるものと信ぜれる。また些細のことかも知れないが、テュルゴーをフィジオクラートと見るのは何うであらうか。

因みに本書は、ブルックリン・カレッヂに籍を置く著者がコロンビア大學　卒業生指導聯合委員會 Joint Committee on Graduate Instruction に提出した哲學博士學位論文の一部である。

前號（第三十六卷三月號）目次

大東亞政策の經濟的課題……山本登
ケインズ利子概論說……千種義人
關東漁業の搖籃期……羽原又吉
古版經濟書解題……高橋誠一郎
　チャールズ・ダヴェナント著「一千六百九十五年版『戰費調達の手段方法に關する一試論』」

購讀料
一部　金五拾錢　郵稅金貳錢
半ケ年分　金貳圓九拾錢　郵稅金拾貳錢
一ケ年分　金五圓四拾錢　郵稅金貳拾四錢
（停）

編輯及び事務に關する一切の用件は發行所へ
營業に關する用件は發賣所へ
原稿締切期日は發行前月十日

昭和十七年三月二十五日印刷納本
昭和十七年四月一日發行
毎月一回一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
第三十六卷第三號

編輯兼發行者　東京市芝區三田慶應義塾內　江田範保
印刷者　東京市赤坂區新町五ノ四二　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五ノ四二　金子活版所

發行所　東京市芝區三田慶應義塾內　理財學會
配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社
發賣所　東京市芝區三田二ノ一　慶應出版社
電話三田(45)二七九一番　振替東京一五八一八〇番

購讀申込は慶應出版社へ